

ゆかいなむかし話シリーズ

ちからにほん いち かくらへ日本一

竹崎 有斐





シリーズ いな むかし話シリーズ

かくらべ日本一



913 ゆかいなむかし話シリーズ

力くらべ日本一

竹崎有斐著

実業之日本社 1981

128P 215cm

小学校中級以上

ゆかいなむかし話シリーズ 力くらべ日本一

昭和56年7月15日 第1版第1刷発行

著者 竹崎有斐

発行者 増田義和

印刷所 株式会社 東京研文社

〒104 東京都中央区銀座1-3-9 振替東京1-326

発行所 実業之日本社 TEL. 販売本部03・535・4441 出版本部03・535・2301

関西支局 TEL.06・312・1573

© Yuhi Takezaki 1981. Printed in Japan 8339-256040-3214

ゆかいなむかし話シリーズ

力くらべ日本一



●
もくじ

こんび
太郎

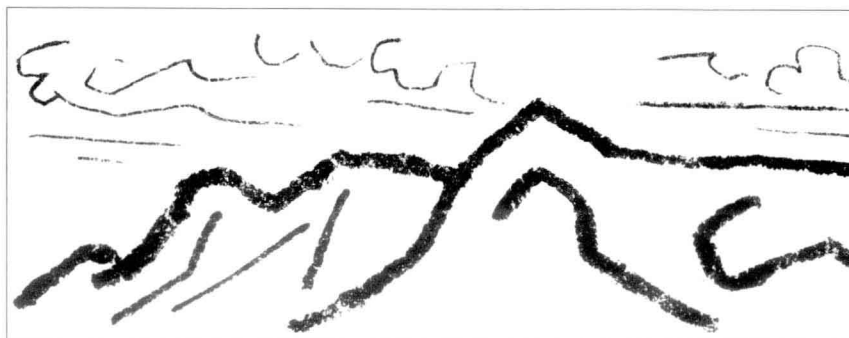
4

三人の
力もち

24



なばのなきぜき	32
塙団右衛門	51
みじかいお話・岩谷の藤佐どんそのⅠ	59
仁王と賀王	62
江戸の横綱	73
大力三十郎	79
みじかいお話・岩谷の藤佐どんそのⅡ	94
辻が城の女大将	96
ももん子太郎	102
解説(西本鶏介)	124



こんび太郎^{たろう}



むかし、あるところに、ひどい
ぶしょうものの、じいとはあがお
った。

じいとばあは、働くことは働くのだが、ぶしょうもんだから、ふろにはいったことがない。だから、あかだらけになっていた。

二人には、子どもがなかったの、あるとき、じいがばあにいった。

「なあ、ばあよ。子どもがないのは、さびしいもんだが、この年になっちゃあ、子どもはできめえ。せめて、二人のコンビ（あか）あつめて、人形でもこさえておくべえ」

そこで、じいとばあは、からだのあかをごしごしおとして、あつめたあかをこねて、人形をこしらえた。

「おやまあ。生きてるみてえに、めんこいわらしだ」

じいとばあは、こしらえた人形に、コンビ太郎と名をつけて、わが子のようにだいじにしていた。

すると、あるとき、じいとばあがめしを食っていると、いままでうごきもせ

なんだこんび太郎が、

「おらも、はらがへったぞ」

と、口をきいた。

おどろいたじいとばあは、さつそくめしを食わせた。こんび太郎は、ばくばく食つて、一ぜん食わせると、一ぜんぶん。三ぜん食わせると、三ぜんぶんでかくなつた。

しまいには、一升たいてもぺろり、三升たいてもぺろりで、とうとう、三斗五升の片馬めしを、ぺろり食うて、頭が天じようをつきぬくほど、でつかくなつた。

じいは、ほとほとあきれて、

「なあ、ばあよ。太郎が元気にそだつはいいが、三ど三ど片馬めし食われちゃ、どうにもならねえ」



と、ばあにいうた。それを聞いたこんび太郎が、

「じいな、じいな、心配するな」

といった。

「おらあ、じいとばあにめいわくかけんように、旅にでる。旅にでるからには、百かんめの鉄ぼう、一本つくってくれ」

じいは、なけなしの銭はたいて、百かんめの鉄ぼうを、かじ屋にたのみにいった。

かじ屋は十日と一日かかって、百かんめの鉄ぼうをうちあげ、十人がかりでやつとこさ車にのせて、えんさえんさひつぱってきた。すると、こんび太郎は、鉄ぼうをつかんで、ひよいともちあげ、どすんとついた。

「それじゃあ、じいもばあも元気でな、そのうち、いいたよりをするべえ」と、鉄ぼうをぶんがぶんがふりまわして、旅にでていった。

こんび太郎たろうは、足のむくまま、じゃんがじゃんが歩いていった。いくがいくがいくと、むこうから、権現ごんげんさまのおやしろみたいな、赤いお堂どうを、ぎしかしぎししかついでやってくる男おとこがいる。お堂どうが道みちいっぱいで、こんび太郎たろうはおれんから、

「こらっ、そこにくるのはだれだあ。こんび太郎たろうさまのおとおりだ、道みちあけろ」とどなると、むこうの男おとこもまけちやいない。

「なにをいう、そっちこそ道みちあけろ。み堂どうっこ太郎たろうさまのおとおりだあ。どかねえならこうしてやる」

み堂どうっこ太郎たろうというたは、み堂どうをかた手てでもちあげ、ぐるぐるまわして、こんび太郎たろうになげつけてきた。

こんび太郎たろうは、そんならこっちも、かた手てでしようぶだと、とんできたみ堂どうをひよいとうけとめ、かた手ての鉄てつぼうを、み堂どうっこ太郎たろうのまたぐらにさしこん



で、ぶんとはねあげた。

すると、み堂どうつこ太郎たろうは空そらの上うえにとんでいった。

ところが、いつまでたっても、おちてこない。どこさいったべと、さがしている、はるかむこうの山やまの、松まつの木きのてっぺんにひっかかって、「ここだ、ここだ。たすけてくんろ」と、み堂どうつこ太郎たろうが、わめいておつた。そこで、こんび太郎たろうは、松まつの木きを根ねつこごとひっこぬいて、み堂どうつこ太郎たろうをおろしてやった。

「どうだ。おそれいったか」

という、み堂どうつこ太郎たろうは、

「とてもかなわん。家来けらいにしてくれ」

と、み堂どうをぎしかしかついで、こんび太郎たろうのあとからついてきた。

二人ふたりが、いくがいくがいつて、山の石切り場いしきばにさしかかると、手のこぶしで、石いしをがきんがきんとわっている男おとこがいた。

〈ほほう、なかなかやるわい〉

と、こんび太郎たろうが見みていると、わった石いしこっぱが、びゅーんととんできた。こんび太郎たろうはよけもしないで、かた鼻はなおさえて、ぶんと鼻息はないきでふきとばした。石いしこっぱは、ふきかえされて、石いしわり男おとこの頭あたまに、ごきんとあたたった。

おこるまいことか、男おとこはかんかんにおこった。

「だれだあ。天下一てんかいの石いしつこ太郎たろうさまの頭あたまに、こともあろうに石いしつこぶつけた

のは」

「なにいうだ。天下第一は、このこんび太郎さまだ。鼻息ふっかけた石っこが、かつてにあたっただけだ。もんくあるかあ」

「そんなら、どっちが天下第一か、勝負するか」

と、石っこ太郎が、山みたいな大石を、ぶんなげぶんなげむかってきた。そこで、こんび太郎が、

「まんず、おまえがあいてしてみるか」

と、いうがはやいか、み堂っこ太郎は、ぐるんぐるん、み堂をまわして、石っこ太郎の前に立ちふさがった。

「み堂っこ太郎さまを知らねえかあ、み堂のかどにあたつてすつとぶまえに、まいりましたといわねえかあ」

すると、石っこ太郎も、大石をさしあげて、



「なんだそんなもの。石っこ太郎さまの石でぶつつぶしてくれる」

と、み堂めがけて大石をなげてきた。

こりゃあ、どっちもどっち、どっちともぶつつぶれてしまうわい、とおもったこんび太郎は、とんできた大石を、鉄ぼうでごつんとたたいた。石はこなごなになれて、われ石の山ができた。

みると、われ石のなかに、石っこ太郎が首だけだして、「たすけちくれえ」と、わめいておった。

たすけてやると、石っこ太郎も、とてもかなわんと、こんび太郎の家来になった。「そんじゃまあ、ついてこい」

と、こんび太郎が、鉄ぼうをついてじやんがじやんが、歩いていくと、そのうしろから、み堂っこ太郎が、ぎしかしぎしかしみ堂をかついでついていく。そのまたうしろから、石っこ太郎が大石を、ごんごろごんごろ、ころがしてつい